

雲仙市国見町神代における歴史的池泉庭園の特性と経年変化

永松義博*, 國分 亮¹

庭園デザイン学研究室

2012年10月11日受付; 2013年1月29日受理

Characteristics and changes of historical Japanese pond gardens in Kunimi-cho, Unzen-shi, over time

Yoshihiro Nagamatsu*, Ryo Kokubu¹

Laboratory of Garden Design, Department of Environmental Horticulture,
Minami-Kyushu University, Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan

Received October 11, 2012; Accepted January 29, 2013

With changes to our living environment, gardens with rich local characteristics have recently begun to disappear. This research focuses on the current conditions of historical gardens scattered around Kunimi district in Nagasaki Prefecture, Kyushu, and the results of questionnaire surveys on their owners. Since the previous investigation, which was carried out in 1991 or 20 years ago, 9 out of 11 gardens have changed: some have vanished or were partially lost, and others have been converted into dry landscape yards. Some of these changes were caused by deterioration of water quality, decrease of water flow, and extension or reconstruction of buildings on the properties. Moreover, due to aging or absence of their owners, most of the gardens are no longer attended on a daily basis and thus have fallen into ruins. In pond-type gardens, water shortage has worsened the irrigation systems and consequently has spoiled the townscape. It has become apparent that preservation of waterways and maintaining water supplies are future challenges for Kunimi district.

Key words : Kunimi, garden type, historical garden, waterway.

1. はじめに

庭園を特徴づけるものは土地と自然風土、人間の意志や思想庭園を実現するための経済的、社会的基盤などであり、その相互関係がひとつの庭園様式を規定する。すなわち作庭地域の地理や気候風土、地形地質、造園材料のような自然環境、作庭家や施主の思想、庭の利用目的や機能などの要因、作庭家の属する社会的、経済的条件、歴史や時代背景、文化や伝統などの人文社会環境といった要因に規定される。

九州地方の歴史的日本庭園は、九州地方の自然環境・風土環境を活かした特徴がみられる。九州地方の古庭園に多くみられる形式として池泉鑑賞式、池泉回遊式に分けられる池泉式庭園があげられる。ま

た、九州地方には江戸期作庭の庭園を中心に13の庭園集団が散在する¹⁾。その一つとして長崎県雲仙市国見町神代地区があげられる。神代鍋島氏の陣屋跡と武家屋敷群からなる伝統的な町並が残る地区である(写真1)。武家屋敷内には庭園が造られ、多くの庭園には池が設けられた。池水は屋敷脇を流れる水路から導水し、相互に結ばれている。水路水を利用し、水路に戻すという流水システムが機能し、特徴的な庭園空間を形成している地域である。同様に九州地方には生活用水を池水として導水した福岡県朝倉市秋月地区の庭園群、福岡県柳川市の庭園群も存在している^{2, 3, 4)}。

近年、生活環境の変化に伴い、郷土色豊かな庭園が消失し始めており、今後の存続が危ぶまれている。本研究は国見町神代地区の水路のシステムに着目し、水路網の現状と散在する歴史的庭園の現状を調査した。さらに、庭園の変化とその要因を明らかにし、

*連絡著者 ¹現所属: 西日本高速道路エンジニアリング



写真1. 庭園を有する武家屋敷群



図1. 調査対象地の位置

庭園所有者の意識調査をもとに今後の保存のあり方を探ることを目的とした。

2. 調査地の概要

(1) 位置

調査地は長崎県雲仙市国見町であり、図1に示すように島原半島の北側に位置する。国見町の大部分は雲仙岳の北側斜面にあり、土壌は雲仙の火山堆積物により肥沃である。住宅地は有明海岸に近い所に集中し、大部分が田畑や山林である。また、島原半島の経済の中心である島原市とは約20kmと近い。

(2) 歴史

井上通泰著「肥前風土記新考」（1934）には、鶴亀城は地形を巧みに利用した戦国時代の山城であり、鎌倉時代以前の往古に築城され、当時は有明海に面し周囲を海に囲まれた海城であったと記されている⁵⁾（図2）。豊臣秀吉の九州征伐の知行割で有馬領（戦国大名として島原半島を中心に統制、支配していた）のうち神代領3000石が鍋島直茂の領分となった。以来、神代は神代鍋島領として佐賀藩の飛び地となった。初代信房以来3代目までは、領主は佐賀に居住したが、島原の乱（1637～8）の後、4代目鍋島蒿就氏以後は神代に本居を構えることとなった。現存する武家屋敷は蒿就氏によって海を埋め立てて整備された（1650～1701）。さらに井戸水に代わる飲料水確保のため「みのつる川」を源流とする人工水路の整備が行われ、その水は洗水、浴用水などの日常の生活用水としても幅広く利用されてきた。明治以降は、多平良町と土倉村、神代村に分かれていたが、昭和31年に多平良町と土倉村が合併し、国見町が誕生した。次いで32年に神代村が合併し、2005年雲仙市国見町となった。

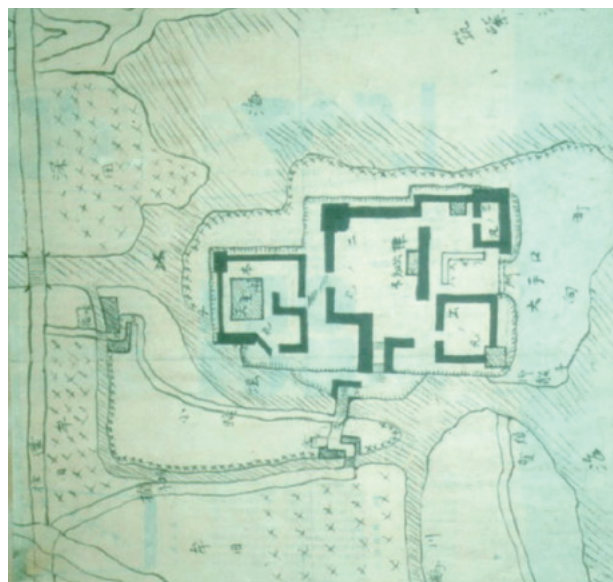


図2. 鶴亀城図（神代鍋島家所蔵）

3. 調査庭園の概要と調査方法

調査を行った庭園群の位置を図3に示す。調査庭園群は、神代川とその支流の「みのつる川」に囲まれた鶴亀城の南側に位置し、南北350m、東西150mの住宅地の南北に延びる道路の添って西側に11カ所の庭園がある（図4）。鶴亀城の本丸跡は現在神社となっている。埋め立て地に建てられた士族の屋敷は、旧鶴亀城二の丸・東小路・西小路・五品と城を中心として設けられた。旧鶴亀城の守りであった川と深田を埋築してつくられた地域は小路と名づけられた。また、鶴亀城の西側を流れていた川を堀切して、みのつる川（神代川の支流）に改めた。堀切した土は西側へ積んで高くし、城側の土地に士族の屋敷がつけられ、その屋敷の一角に庭園が作庭された⁶⁾。これらの庭園群の作庭

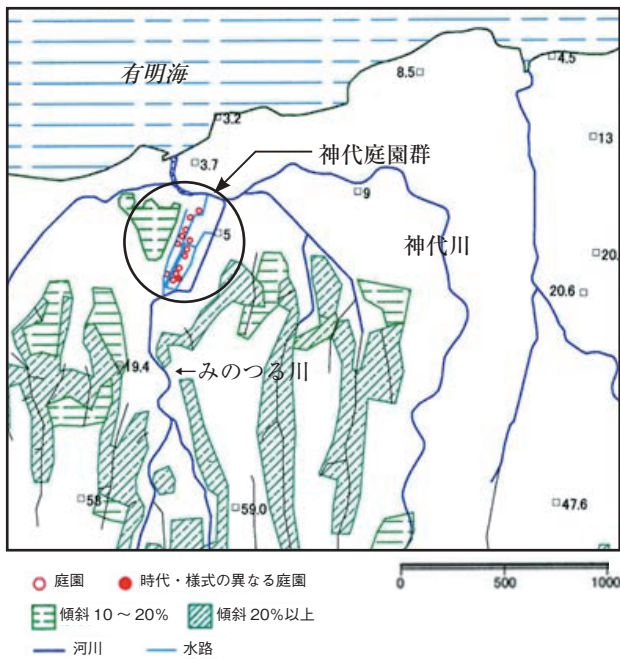


図3. 神代庭園群の地形模式図

時期は、武家屋敷が設けられた時期とほぼ一致すると考えられ、1700年前後と推定される。宝永5年（1708）5代目茂樹の時代に島原半島地方で悪疫（赤痢）が流行し、防疫の目的で庭園の一部である池を取り壊すことになったという記録が残っている⁶⁾。さらに昭和32年（1957）7月25日の大水害では、神代地区の庭園にも被害が及んだ。

今日現存する庭園、川崎氏庭園、井上氏庭園、中島氏庭園、谷氏庭園、小柳氏庭園、榊屋氏庭園、樋渡氏庭園、今村氏庭園、中山氏庭園、帆足氏庭園、伊藤氏庭園の11庭園について調査した。今回の調査と1991年の庭園実測調査の結果を、20年間の経年変化で比較し、各庭園の保存状況、変化要因を検討した。また、所有者の庭園に対する意識調査は、日常生活で感じる湿気、池泉の水量、水質、ごみの問題、庭園保存の意思やその理由などをヒアリングにより調査した。現地調査は2010年8月、12月及び2011年1月に実施した。

4. 庭園の特徴

調査庭園の実測図を図5～15に示す。図16は庭園の導水模式図である。全て敷地に平行して流れる水路から導水していることが特徴である。各庭園の池泉の形状、水の取り入れ方は中山氏、榊屋氏、小柳氏の3庭園では流水面と池水面であり、大きく蛇行したU字型の水路を持っている。今村氏、中島氏、谷氏、川崎氏の4庭園の池泉は、暗渠となっているために流れはなく、池面しか存在しない。また、中島氏庭園では池泉の底に玉石を敷き詰めており、谷氏庭園では護岸の地固めに乱杭止めの手法をとっているなど、特徴的な技法も



図4. 水路と池泉庭園のつながり

みられる。しかし、川崎氏以外の庭園は災害などにより補修・改修がおこなわれたため、作庭時の特徴であるとは言えない部分もある。さらに水路の整備は生活用水としての利用の他に防災上の役割も見逃せない。つまり各戸の池泉は防火水槽的な役割も果たしていると考えられる。神代の池泉庭園は江戸時代に形成されているが生活上の要求や社会的要請から水路水を利用した池泉庭園が定着したと考えられる。池泉は水路に平行してつくられているが各戸で独立したものではなく、水系ネットワークを形成し、相互に結ばれている。

表1は、神代地方の庭園特性を池の形状、庭園面積、水面率、庭園形式、隣接水路、池水の流れ、主比高についてみたものである。池の形状は蛇行タイプが最も多く、小庭ながらも奥深さを演出できる方法である。水面率は平均13～14%で池泉鑑賞の形式をもつ庭園である。特に、中山氏庭園、榊屋氏庭園、小柳氏庭園、また暗渠ではあるが今村氏庭園、中島氏庭園、谷氏庭園、川崎氏庭園にみられる同一の水路を利用して給排

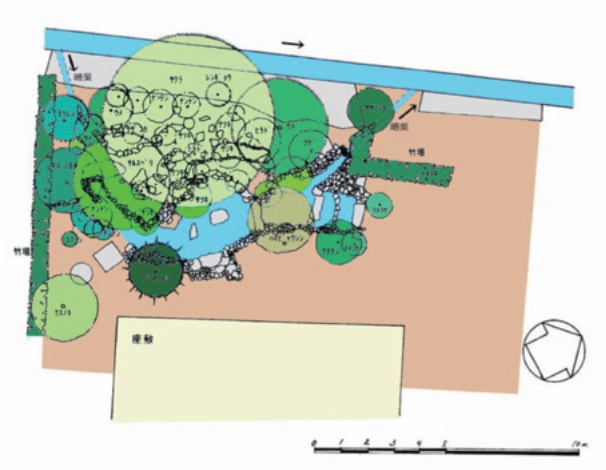


図5. 川崎氏庭園実測図

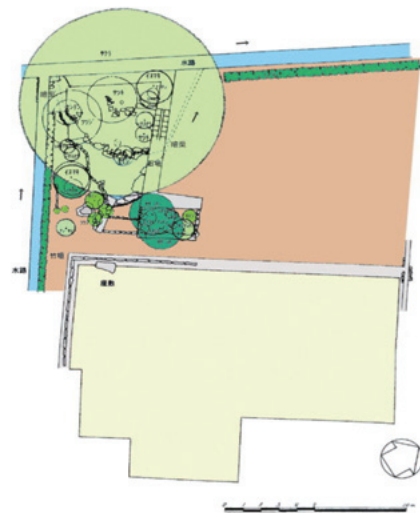


図8. 谷氏庭園実測図

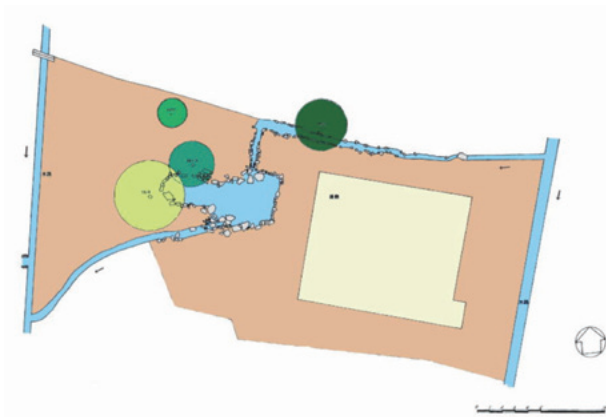


図6. 井上氏庭園実測図

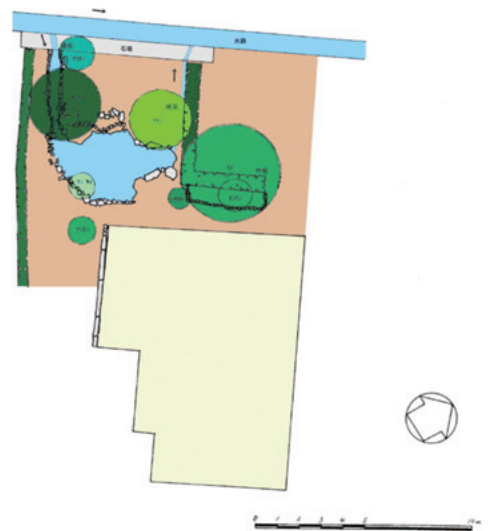


図9. 小柳氏庭園実測図



図7. 中島氏庭園実測図

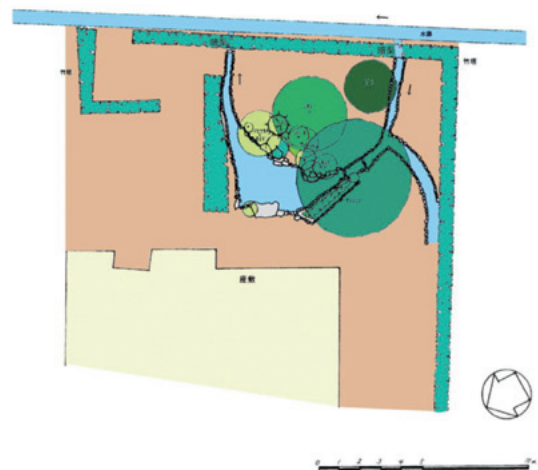


図10. 桝屋氏庭園実測図

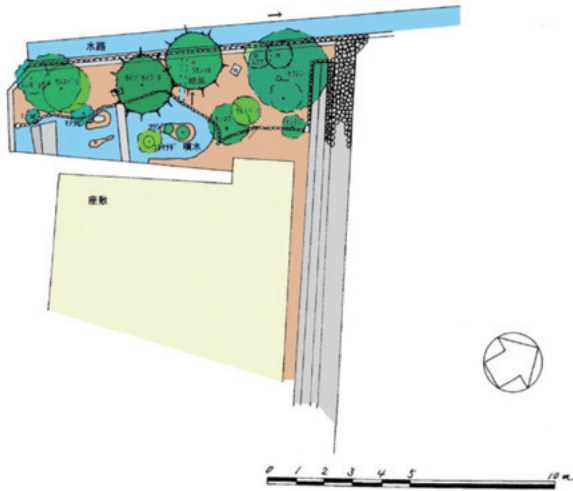


図11. 樋渡氏庭園実測図

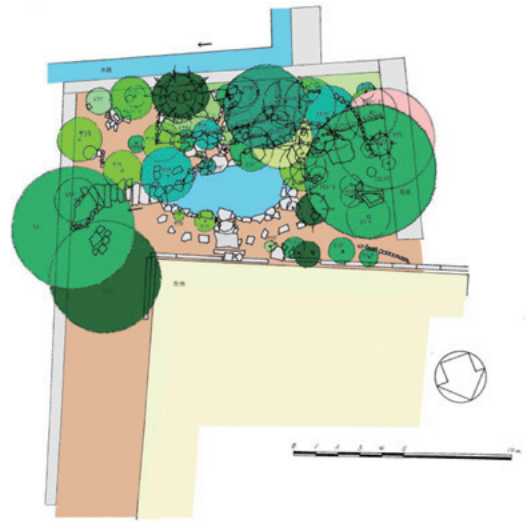


図14. 帆足氏庭園実測図



図12. 今村氏庭園実測図

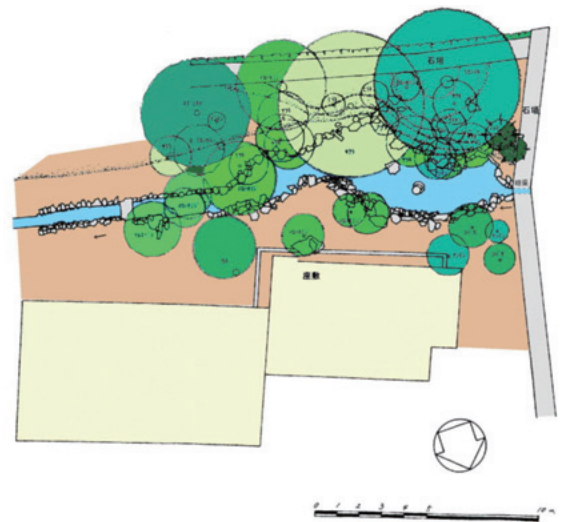


図15. 伊藤氏庭園実測図



図13. 中山氏庭園実測図

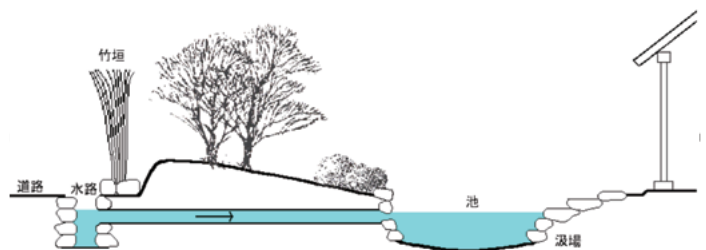


図16. 池泉庭園の導水モデル

表1. 神代地区の庭園特性

庭園名	形 状	庭園面積	水面率	庭園形式	隣接水路	池水の流れ	主比高
川崎邸庭園	蛇行横断（池泉型）	99m ²	16%	池泉定視	1 方向	南→北	50～150cm
井上邸庭園	直接横断（流水型）	175m ²	25%	池泉定視	1 方向	南→北	30～80cm
谷邸庭園	蛇行横断（流水型）	63m ²	14%	池泉定視	1 方向	南→北	40～60cm
中島邸庭園	蛇行横断（流水型）	220m ²	5%	池泉定視	1 方向	南→北	30～120cm
小柳邸庭園	単純湾曲（流水+池泉型）	55m ²	27%	池泉定視	1 方向	南→北	50～80cm
樋渡邸庭園	蛇行横断（流水+池泉型）	42m ²	31%	池泉定視	1 方向	南→北	40cm前後
枡屋邸庭園	蛇行横断（流水+池泉型）	101m ²	13%	池泉定視	1 方向	南→北	85～130cm
今村邸庭園	蛇行横断（流水型）	146m ²	14%	池泉定視	1 方向	南→北	20～100cm
中山邸庭園	単純湾曲（池泉型）	283m ²	11%	池泉定視	1 方向	南→北	40～100cm
帆足邸庭園	蛇行横断（池泉型）	120m ²	15%	池泉回遊	1 方向	西→東	70cm前後
伊藤邸庭園	蛇行横断（池泉型）	190m ²	16%	池泉定視	1 方向	西→東	50～160cm

表2. 神代地方の庭園変化状況

庭園名	変化箇所	変化内容	現状と今後	管理状態
川崎邸庭園	変化なし	変化なし	管理がよくなされている。池は代々先祖から継承しているのが誇りである。暗渠によって取水している。自然ごみもない。昔からあるので保存していきたい。	A
井上邸庭園	庭園全域	枯山水化・護岸崩壊	家屋は解体されている。池は残っているが護岸が壊れ、改修が必要である。庭園は枯山水化している。変化管理理由は所有者変化によるもの。伝統家屋であるので誰かに継承してもらいたい。	C
谷邸庭園	変化なし	変化なし	池の護岸に松の乱杭が施してある。暗渠により取水している。湿気は常に多い。水質は悪化し自然ごみが多い。伝統家屋なので後継者がいなくても守っていききたい。	B
中島邸庭園	庭園全域	枯山水化・池泉縮小	空き家。放置状態。池泉に水がほとんどなく護岸も壊れている。管理もなされていない。庭が藪のようになっている状態。護岸のみ残っている。	C
小柳邸庭園	池泉護岸	護岸崩壊	護岸の一部が壊れている。高齢化のため管理困難。自然ごみが多い。庭園を保存会に引き渡す予定。	B
樋渡邸庭園	池泉護岸	池泉縮小	池泉が改修されている。管理がやや不十分。	B
枡屋邸庭園	庭園全域	枯山水化・池泉縮小	家屋が倒壊している。放置状態で庭園は荒廃している。	C
今村邸庭園	護岸全般	護岸改修	空き家であったが交流会館として利用されている。護岸の石が部分的に池に落ちている。放置状態であったが剪定などの手入れを行い改善された。	B
中山邸庭園	池泉	護岸崩壊	空き家のため庭園の管理は行き届いていない。池の護岸は壊れかけている。	B
帆足邸庭園	池泉護岸	護岸崩壊	護岸の一部が崩壊している。自分で手入れをしているが管理が行き届かない。水量少なく水質は悪い。湿気での不快感はない。池泉のごみは自然ごみが多い。重要伝統的建造物群保存地区となっているので、保存していきたい。	B
伊藤邸庭園	池泉護岸	護岸崩壊	水量減少と管理困難のため庭園は荒廃している。湿気に不快感はなく水質は変化を感じないが、自然ごみが多い。庭園の理解者に保存を託したい。	C

※庭園の保存・管理状態 A：庭園は原形をとどめ、管理状態も良好なもの

B：庭園は原形をとどめているものの、管理不十分なもの

C：庭園は荒廃し、放置状態のもの

水がおこなわれる方法は、神代地方の庭園がもつ極めて特徴的な給排水システムといえる。

5. 庭園の経年変化

庭園の20年間の変化箇所・変化内容・現状と今後・管理状態は表2の通りである。変化のない庭園は11庭

園の中で2庭園であるのに対し、何らかの変化がみられる庭園は9庭園である。変化した箇所は池泉が圧倒的に多い。表3は池泉の変化状況である。家屋の増改築や池泉が縮小した庭園が6ヶ所で最も多い。改修された庭園は3庭園である。池泉庭園が枯山水庭に改修された庭園や池水が枯渇した庭園は4庭園にものぼる。写真2は荒廃した小柳邸庭園である。写真3は池水が枯渇し池泉の一部が消失した伊藤邸庭園である。写真4は住宅の改築によって池泉が埋め立てられ庭園が消失した井上邸庭園である。

図17は庭園変化の理由（所有者への聞き取り調査に基づく、複数回答）である。庭園の変化理由は「水量減少」が最も多く8割以上を占め、次いで「所有者変化」「管理困難」「水質汚濁」となっている。池泉庭園の変化理由の多くは池泉の問題に起因していることがわかる。

6. 所有者の意識

池泉庭園と日常的な湿気感との関係は表4の通りで

表3. 池泉の変化

庭園名	変化なし	縮小	改修	枯山水化
		〔池泉一部消失〕	〔池泉護岸〕	
川崎邸庭園	○			
井上邸庭園			○	○
谷邸庭園	○			
中島邸庭園		○		○
小柳邸庭園		○		
樋渡邸庭園			○	
栢屋邸庭園		○		○
今村邸庭園		○		○
中山邸庭園		○		
帆足邸庭園			○	
伊藤邸庭園		○		
合 計	2	6	3	4

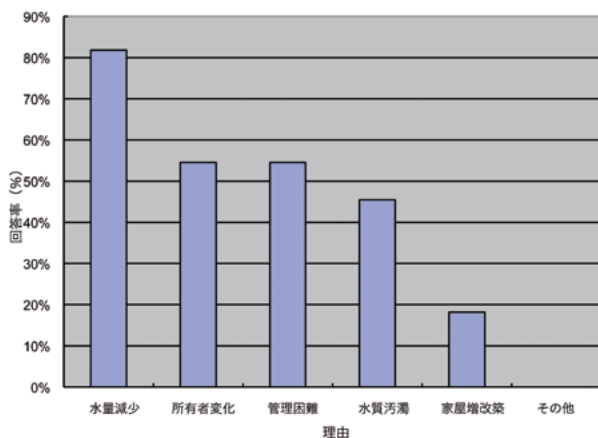


図17. 庭園の変化理由（複数回答）

ある。「不快感は無い」という回答は9庭園である。少数回答として「子供の頃からずっとそこで暮らしているので慣れている」「風通しを良くしているから悪くない」といった意見もあった。

池泉の水量の変化は表5である。「少ない」という回答が11庭園中9庭園にものぼっている。池泉の水質を表6に示す。「悪化」という回答が11庭園中9庭園で、変化を感じない庭園は、僅かに2ヶ所である。表7は池泉にあるごみについての結果である。落ち葉や枯れ草など自然ごみと答えたのは11庭園中10庭園で最も多い。日常生活で出されるごみと答えたのは1庭園で



写真2. 荒廃した庭園（小柳邸）



写真3. 池水が枯渇した庭園（伊藤邸）



写真4. 住宅の改築によって消失した庭園（井上邸）

ある。「木々の葉などの自然ごみの処理はきりがない」という意見も少数みられる。

所有者が保存の意思を示したのは庭園は7庭園で、保存したい理由は「昔からある」「心が和む」「自然を楽しめる」という回答が多かった（表8）。保存の期間は「自分の代」だけという回答が多く（表9）、保存意思のない理由の主なもの「管理困難」であった（表10）。

表4. 日常で感じる湿気

庭園名	常に多い	時に多い	不快感は無い
川崎邸庭園			○
井上邸庭園			○
谷邸庭園	○		
中島邸庭園			○
小柳邸庭園			○
樋渡邸庭園			○
枡屋邸庭園			○
今村邸庭園			○
中山邸庭園			○
帆足邸庭園		○	
伊藤邸庭園			○
合 計	1	1	9

表5. 池泉の水量変化

庭園名	多い	感じない	少ない
川崎邸庭園		○	
井上邸庭園			○
谷邸庭園		○	
中島邸庭園			○
小柳邸庭園			○
樋渡邸庭園			○
枡屋邸庭園			○
今村邸庭園			○
中山邸庭園			○
帆足邸庭園			○
伊藤邸庭園			○
合 計		2	9

表6. 池泉の水質変化

池泉の水質変化	良好	感じない	悪化
川崎邸庭園		○	
井上邸庭園			○
谷邸庭園		○	
中島邸庭園			○
小柳邸庭園			○
樋渡邸庭園			○
枡屋邸庭園			○
今村邸庭園			○
中山邸庭園			○
帆足邸庭園			○
伊藤邸庭園			○
合 計		2	9

以上の結果から、多くの庭園所有者は池泉庭園に愛着をもっていること、少なくとも自分の代だけでも存続させたいと考えていることが明らかになった。しかし、池水の状態悪化や管理上の理由から庭園の存続が難しいと考える所有者も少なくないといえる。

表7. 池泉のごみ

庭園名	自然ごみ	生活ごみ	あまり無い
川崎邸庭園			○
井上邸庭園	○		
谷邸庭園	○		
中島邸庭園	○		
小柳邸庭園	○	○	
樋渡邸庭園	○		
枡屋邸庭園	○		
今村邸庭園	○		
中山邸庭園	○		
帆足邸庭園	○		
伊藤邸庭園	○		
合 計	10	1	1

表8. 保存したい理由

理 由	回答数
(1) 昔からある	7
(2) 心が和む	4
(3) 自然を楽しめる	4

(単位：庭園数)

表9. 保存したい期間

期 間	回答数
(1) 自分の代	7
(2) 子々孫々	2
(3) 息子の代	0
(4) わからない	0

(単位：庭園数)

表10. 保存できない理由

理 由	回答数
(1) 管理困難	5
(2) 水質の悪さ	1
(3) 駐車場確保	0

(単位：庭園数)

7. おわりに

神代地方の歴史的庭園の多くは、池泉庭園で藩政期の武家屋敷内に作庭されている。庭園の形式と配置は堀割と密接な関係にあり、池泉は堀割から屋敷への用水導入の役目を担っている。池泉は水系の一部をなし、生活用水としての利用以外に防災上の役割もあり、各戸の池泉は防火水槽的な役割も果たしてきたと考えられる。

流れのある池水庭園として特徴づけられる神代地方の庭園は、過去20年間に多くの改修または縮小されたことが確認できた。「管理困難」や「水量減少」などの理由で消失、荒廃している庭園もあることが明らかになった。住宅が空き家になったり、住人が高齢化して日常的な手入れが行き届かなくなった庭園もあり、水系ネットワークとは別に個人の水路もみられた。

庭の質を維持するには、適切な手入れが年間を通して行われること、経済的援助などの補助制度や技術的指導が行われることが必要である。神代における庭園の荒廃は、水路水を生活用水として利用しなくなったことも要因である。庭園の荒廃や水量の不足は水路環境を著しく悪化させ、町並みの景観をも損ねる結果となっている。水源となる水路および水量の確保などの環境の整備は、歴史的庭園の保存上、重要な課題である。

要 約

近年生活環境の変化に伴い、郷土色豊かな庭園が消失し始めている。本研究では長崎県雲仙市国見町神代地方に散在する歴史的庭園の保全に関する現況調査と

所有者への意識調査をおこなった。1991年の調査時から20年間で消失、部分的に消失、枯山水庭への改修など、何らかの変化があった庭園は11庭園中、9庭園に上がった。主な理由として水質の悪化や水量減少、住宅の増改築などがあげられた。その他に住人の高齢化や不在により、日常的な手入れが行き届かなくなり、荒廃している庭園も多くみられた。池泉式庭園において水量の不足は水路環境を悪化させ、町並み景観を損ねることにもなるため、水源となる水路の保全と水量の確保が今後の課題であることが明らかになった。

参考文献

- 1) 永松義博（1994）九州地方における歴史的日本庭園の特性に関する研究 造園雑誌 **57**(4): 346-352.
- 2) 永松義博, 池田二郎（1995）長崎県神代地方における水環境と庭園形態に関する研究 日本庭園学会誌 **3**: 10-18.
- 3) 永松義博, 田島基記（1998）地域環境と庭園形式に関する研究Ⅱ 南九州大学園芸学部研究報告 **28A**: 36-47.
- 4) 永松義博, 日高英二（2008）城下町秋月の町並み構成と庭園の特性に関する研究 南九州大学園芸学部研究報告 **38A**: 19-29.
- 5) 井上通泰（1934）肥前風土記新考 巧人社 155PP
- 6) 国見町神代小路伝統的建造物群保存対策調査報告（2003）国見町教育委員会.